

# 歌に触れる

遊 縁 の 衆 (人生を数倍楽しむ会)

平成二十三年十二月十七日(第十一回)

(佐藤 紀之)

冬枯れの山々の肌しとことと降る雨重し濡れて日暮れる  
アラフォーの背中押して 応援団 我が子に注げ 愛の言葉

「あなたしかない」の言葉で 漆黒の森に差し込む 黄金の日差し

闇の底聞こえる生徒の掛け声に 白く吐く息 我は思えり

錦秋の山迫り来る 窓辺より眺める景色を 独り占めにす

眼を凝らし 見ゆる祠も 染まるごと 三吉山も 燃える秋なり

助けてと言えない心が 一足の靴を隠せる 思春期の揺れ

読み語る 保護者の感動 聴きひたる 朝のひとつき 育て若人

開け放つ 窓より流るる 歌声は 蝉時雨のごと 胸キュンとなる

歌ったび 少しずつだが 見えてくる みんなが合わせる 心のピント

「よのなか科」生徒と保護者が サプライズ 「正解のない」 学びのライブ

(佐藤 亮照)

今年また輝くもみじ 人の群れ ありがたきかな 寺の賑わい

娘らの 新居訪れ くるるきて 幼き姿 孫と重なる

(松田 昌泰)

残照に 長く伸びたる 影ふたつ ふうつく 愛犬さ さえる老女

雪囲い 終えて 安堵の 家の中 落ち葉も おまけに 追いかけてくる

(黒沼 貞志)

「赤芝峡と温見平で詠みし五首」

県境の ふところ 深き ブナの 森 われ抱かれし サンクチュアリ

分け入りて 妻と 溶けこむ 白い森 おぐにの 秋に ひとすら癒され

秋嶺の 色づく 山肌 斜光射し 暮ゆく 変化に 歩みを止めん

あかあかと 川面に 映りし 山の秋 見紛うばかりに 声にも窮す

ブナ林 見つけし 倒木 苔むして 想いも 馳せる 幾星霜

# 歌に触れる

遊縁の衆(人生を数倍楽しむ会)

「富神山と県民の森で詠みし六首」

広々と親子で 独占 秋景色 幼き脳裏に 何か残らん

秋冷の 霧が隠した 市街地を 眼下に随え 沈黙しじまの里山

親子づれ・友らのハイク・釣り人と 行楽それぞれ それぞれの秋

つれ合いと紅葉三昧 秋ハイク 留めしメモリー テレビで再現

静けさに ひっそりとけ込む 秋暮色 微妙な色調 心にとどめ

遠き山 近きイチョウと 水面雲みなせ いろどり映して 静寂の秋

「冬至間近かに訪れた石行寺にて詠みし四首」

朝陽の 光さし込む 観音堂 瀬音にのせて 願いを込めん

刺す冷気 竜の川音 息白し 鳥の一声 裂いて際立つ

昇陽の 光をつけし 石仏に ともに佇む 山茶花とわれ

光さす 落葉の道に 導かれ 日吉のやしろに ひとり佇む

(中村 昌平)

初雪に染まる庭 見て苦笑い 積もる嬉しき雪 揺ぎの日々

(千葉 克明)

木枯らしが 運ぶ落葉の あと始末 辛くもありし 楽しくもあり

和服着て 茶を点たてしぞ 初めての 日本男子の 根底おぼゆ